

ほな歴史通信

第55号
2010. 6. 1

町文化福祉会館「まいん」をはぐくむ住民力

「まいん」オープン基調講演から

去る三月十七日、町文化福祉会館「まいん」の開館に先立ち余暇センターやみぞを会場に、国立大学法人筑波大学大学院人間総合科学研究科蓮見孝先生による講演会が「大子町文化福祉会館『まいん』を育む住民力」と題して行われた。紙幅の関係上、詳細な紹介はできないが、その概要の一端を紹介しよう。

戦後の日本は、朝鮮動乱によるアメリカの特需により、工業化への道を歩み出した。当時の日本は、物は欠乏し、人々のくらしは苦しかった。その後、日本は経済の高度成長により、消費の時代となり、物が売れる時代となった。しかし、現在は、経済主導型社会は限界にきている。循環型の社会でなければならぬ。そのためには脱消費、脱拡大型パラダイムへの転換が必要である。どうするか、その例として大子町と類似性のある徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」によるまちづくりや岐阜県伊那市明智町のさびれたありのままのすがたを見せる「日本大正村」、古い煉瓦造りの建物を再利用した石川県・金沢市の「市民芸術村」等を例にまちづくり住民力について紹介された。本稿では、岐阜県明智町と金沢市の「市民芸術村」のまちづくりの二事例を取り上げる。

岐阜県明智町は、人口七千の町、明治から大正時代にかけて

生糸の生産と取引で大いに栄え、立派な商家やモダンな洋館が軒を並べ、賑わいに満ちたまちであった。しかし、昭和三十年代に入ると、化学繊維の普及などから生糸の輸出の減少、林業の衰退などにより、急速に過疎化が進み、高齢者の多い元気がないゴーストタウンになっていった。

昭和五十八年、一人の写真家が訪れた。その写真家は、大正時代の浪漫の漂うこのまちの佇まいや人情に強い魅力を感じ、「大正村構想」を提案した。それに意気を感じた観光局長や数人の町民によって「立村宣言」がなされ、まちづくりがはじまった。民間の活動の高まりとともに町がバックアップし財団となった。月並みになりがちなハコモノ施設づくりには依存せず、古いまちなみを他に類なき物として認識し、高齢者が街かど案内人となって、ありのままのまちを案内している。古き時代を呼びもどしたむらづくりは、他に例を見ないまちづくりである。

金沢市の芸術村は、古びた煉瓦造りの建物を活用し、金沢市文化創造財団が運営する施設である。「見せるより使う建物を」主眼に、「市民が主役」をキャッチフレーズに語り合い、「どんな文化活動をしたいか」など、市民のニーズ調査を行った。その結果、「二十四時間オープン、年中無休、低料金」、施設の管理は、「火の管理の徹底」、使用後の「原状復帰」だけを条件とした利用者個人に任せる自主管理方式により、使われる施設として高い利用率を保持している。

以上、述べてきたように前者は、ありのままのまちのすがたをさらすだけで過疎のまちを蘇生させた例であり、後者の例は古びた煉瓦造りの倉庫を活用し、芸術活動の場を地域に根付かせていった例である。最後に講師の先生は、大子町にも素晴らしい施設「まいん」ができた。この施設が町民一人一人に愛用され、存在感のある施設として活用されるためには、まいんを育む住民力をいかに育てるにかかっている。(小澤)

田野草村の熊野権現の古い絵馬

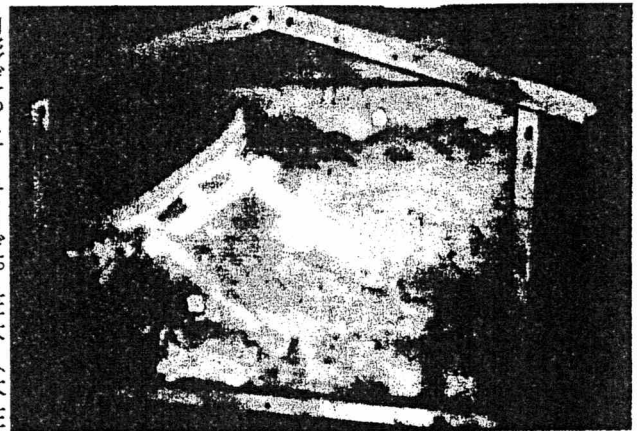
飯村尋道

下野宮の宿から高田への山道は、昔の奥州街道で高田への上坂である馬坂には、安永五年（一七七六）八月に建てられた古い道標があつて「右ハたなくら、左ハたのくさ」と刻んである。「たのくさ」について、小宮山楓軒の『水府志料』（文化二年）に「田野草村、此村奥州堺に在り。此亦近村に優れて高き地なり」とあり、また『新編常陸国誌』（天保年間）には「田野草村、萬治二年、下野宮村ヨリ分カレテ一村トナル、天保十年、高田ト改ム」とある。

高田の旧村社である熊野神社は、田野草村当時から村鎮守で、人家が散在する上柳田の滝ノ沢を渡った山中に鎮座する。この熊野神社には、「鳥居の棟上げの様子を描いた古い絵馬がある」と聞いて、地元の方の案内で訪ねてみた。

明治七年に地元高田村や町附村の有志の寄進による古い風化した石段を上がると、杉の古老木が鬱蒼と茂り、昼なお暗く靈氣漂う中に木造の両部鳥居が建っている。両部鳥居とは本柱の前後に二本ずつ控柱（稚児柱）があり、これを貫で連結補強した様式で、代表的なものに安芸の宮島神社の鳥居がある。

この鳥居をくぐって苦むした石段を上がると拝殿があり、目的の絵馬は拝殿の中に掲げられてあつた。絵馬は横が五十七糎縦が四十七糎程である。絵馬には、横に寝かせた縄をはり、「せえの、よいしょ」と、大きな掛け声をあげながら引き起こしている股引姿の農民や人足たち。腕組みをしてそれをじっと見守っている赤い柄の派手な半纏を着込んだ大工棟梁。「起こせ、起こせ」と両手をあげてあおっている羽織袴に脇差しをさした役人など。どの人物も顔の表情まで実に見事な極彩色で描かれている。なんと鳥居の柱には両部鳥居のため、貫を通す



穴まで緻密に描かれている。絵馬の裏書きに「鳥居建之、慶応四年辰二月十四日」とあり、この時に奉納されたのだろう。昭和になってからも修理され、地元下野宮の大工棟梁などの名前も記されている。

この絵馬と鳥居について地元の人のお話では「鳥居のタテメエの絵馬は、もとは鳥居のムネに下がっていた。現在のムネだけが当時のままで、柱は何回か取り替えている。もとの柱は八角形だった」そうだ。笠木（本柱の上に載った棟木）だけが慶応四年当時のもので、絵馬はその下に額束（扁額）として掲げられていたという。

慶応四年（一八六八、同年九月八日、明治と改元）と言ったら、戊辰戦争があり、特に当地方は天狗党と諸生党の両派による復讐戦のまっただ中であつて、奥州との国境である高田村の入り口には、会津を逃れた諸生軍の水戸領内への進入を阻止するための関門（関所）が設置された。関門跡は旧下野宮保育所の先にあり、今も地元の人には「関門平」と呼んでいる。

慶応四年という残酷暴行の騒然とした激動の世情にあつても高田村の人たちは、村の鎮守の鳥居を建立した絵馬を奉納している。郷土の先人達の敬神の思いに胸を打たれて山を下りた。

【昭和の初め頃の農家の仕事一二】 自給自足二豆腐挽き

昔は農家では今のようには肉はあまり食べなかった。

農家では牛や馬などの家畜を使って仕事をしたので、家畜は大事な働き手であり、食用にするものではなかった。そのほか宗教的な影響もあったので、四つ足の獣は食べない風習だった。

家畜の中で食用にしたのは鶏と兎だった。兎は四つ足だが鶏と同じように考え、一羽、二羽と数えていた。

だから主なタンパク源は魚と大豆など豆類だけと言う状態だった。大豆は多くの農家で作ったから納豆、味噌、豆腐などの外、煮豆や炒り豆等に加工して食べていた。

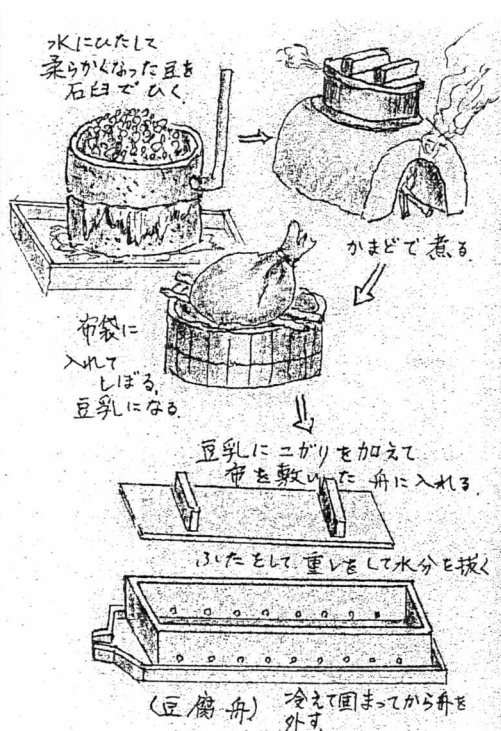
しかし、納豆も味噌も豆腐も作るには手間がかかり、そう簡単に出るものではない。農閑期を利用して時々やるくらいだった。

豆腐は大豆から作る。先ず大豆を水に浸して一、二昼夜くらいおく。柔らかくなった豆を石臼で挽き、それを竈で煮る。

次に布袋に入れて絞る。大切なタンパク質の部分は流れだし容器に溜まる。これは豆乳と言って栄養価の高い飲み物になる。

袋に残った大豆の皮などはおからと言って、これも捨てないで食べ物にしたり、家畜の飼料にした。

この豆乳ににがりを入れると次第にタンパク質が固まって来る。にがりを入れた豆乳がまだ暖かいうちに、布を敷いた豆腐舟に流し込む。布を被せ包むようにしてその上に蓋をして重しを載せて冷ます。余分な水は舟の小さな穴から流れ出し、舟の中には豆腐になるタンパク質だけが残る。やがて豆乳が冷えると固まって豆腐になる。



(石井)

豆腐舟は底と廻りが離れる様に作ってあるので、廻りの部分を取り外し布をほどいて適当な大きさに切る。舟には豆腐の大きさに筋が彫ってあり、それが豆腐に筋となって現れるので、その筋通りに切り分ければよいわけである。

切り分けた豆腐は冷たい水の中に入れて冷やして置く。水の中の方が豆腐の形が崩れない上に、豆腐の質が悪くならないのだ。

作り方によって固い豆腐や柔らかい豆腐になる事があるので、経験のある年寄りが色々と指導してくれる。なかなか面白い。油締めにしても豆腐挽きにしても、年寄りの経験を受け継ぐいい機会になる。

今はもうそんな楽しい共同作業は見られなくなった。

【昭和の初め頃の農家の仕事一三】 自給自足三味噌搗き

今は食事に必要な調味料には様々なものがあり、味も多様で食事に彩りと変化を与えてくれる。

昔は味噌が中心でそのほかには醤油くらいで、そう多くはなかった。しょっぱい物だけと言う感じだった。

醤油は家庭で作るのが難しく、多くの農家では味噌を搗いて使っていた。味噌が唯一の調味料だった。

味噌は大豆や米が原料だ。

味噌を搗くのは三月か四月頃で、寒くもなく暑くもない時期がいい。作り方は

一、先ず米から麴を作る。米は洗ってから一昼夜ほど水に浸し、水分を切ってからちようど赤飯くらいの堅さに蒸す。

これを少し冷まして人肌加減になったら、麴菌を加えて冷めないように保温する。これを麴を寝せるといふ。

気候や保温の状態にもよるが、三、四日で出来る。時々状況を見て混ぜ返したり温度調節をしないと失敗する。

二、大豆はよく洗って一昼夜水に浸す。次に指で潰れるくらい柔らかく煮て豆を潰す。今は家庭用に餅つきの機械や豆を潰す道具があるが、昔は臼と杵で搗いて潰した。だから味噌搗きと言うのだ。

柔らかくなった大豆は直ぐに使ってもいいのだが、適当なブロックにして藁で縛り、数日間室内につるして置く事がある。こうすると大豆の色が茶色になってきて、色のいい味噌が出来る。

三、潰した大豆に麴と塩を加えてよく混ぜる。豆と麴はほぼ同量で、塩は約半分くらいだが、豆一升に対して入れる塩の量により五合塩とか七合塩などという。

よく混ぜて、固すぎず柔らかすぎず適当な堅さにする。固い時は豆を煮た時の煮汁を入れて調整する。

四、味噌桶に入れて雑菌が入らないように丁寧に蓋をして、涼しくなる秋まで冷暗所に保存する。

ここでは豆と麴と塩の割合は昔からの単位の升・合を使っている。

味噌には使用する麴によって米味噌、豆味噌、麦味噌などがある。また材料や作り方によって大きく白味噌と、赤味噌に分けられる。

白味噌は米麴を多く使った味噌で、主に京都など関西方面に多い。赤味噌は米の外麦や豆の麴を使う味噌で、やや辛みが強い味噌である。仙台味噌とか、江戸味噌などに代表される。岡崎味噌は豆麴を使う味噌である。

味噌桶を保存する場所は、多くの農家では昔から味噌部屋などと言って一定の場所に決まっている。

味噌部屋には古くから麴菌が住み着いていて、そのため同じ材料を使って作っても、その農家の特徴のある味噌の味や香りになるといふ。

これを昔から手前味噌などと言って、各家庭自慢の味噌になるわけだ。

農村では今でも自家用に味噌を搗く家庭はあるが、それでも以前よりは味噌を搗く事が少なくなつて、出来合いの味噌を買う家庭が多くなつている。

自分の家で大豆を作ったり、麴を寝せたりする事が難しく容易ではないので、自然買ひ味噌を使うことになる。

手前味噌を自慢することが少なくなり、ちよつと淋しい事だが、何処へ行つても同じような味噌汁の味になつてしまふかも知れない。

(石井)

観光ボランティアガイド活動について

近年、全国各地で観光ボランティアガイド活動が活発になっている。観光ボランティアガイドとは、無料又は低廉な料金で、訪れる旅行者にボランティアで自分達が暮らしている地域等の魅力を案内・紹介している方々のことである。(社)日本観光協会の調べによると、現在各地で活動している観光ボランティアガイド組織は、千五百以上あり、その数はますます増えつつある。

大子町においても、昨年から大子町商工会内において養成講座を開講し、その修了生を中心に約二十名の知識豊富な地元の方々が、町内の史跡、文化財、観光施設の案内など町の活性化のために精力的に活動されている。

県内では、常陸太田市が早くから観光ボランティアガイド組織を発足させていた。五年前に常陸太田市の観光ボランティアガイドと市内めぐりをした機会があったので、その体験を紹介したい。

常陸太田市の観光ボランティアガイド組織「常陸太田まちかど案内人の会」は、平成十二年九月に結成された。現在約四十名が会員登録をしており、西山荘をはじめ、市内の自然、文化、歴史遺産等の案内をボランティアで行っている。観光シーズンや西山荘のイベント開催時には、西山荘の入口にある西山の里桃源内に「案内します。」の看板を出している。

常陸太田市は、おなじみの水戸藩二代藩主の徳川光圀が、晩年を過ごしたところであり、また佐竹氏の城下町でもあり、両家ゆかりの名所旧跡が数多く点在する歴史の里である。「まちかど案内人」の方々による案内で、午前中は、佐竹寺(国指定重

要文化財)から山寺水道の碑(県指定史跡)、旧九昌寺跡(徳川光圀が生母の冥福を祈るために唐風七堂伽藍を建立)、西山荘までをかつて黄門様が使っていた道を歩いた。その後、西山荘内を見学し、桃源において昼食をとった。午後は、常陸太田市の中心街、別名「鯨が丘」に移動した。鯨の背のような長い台地にあるので、そのように呼ばれている。鯨が丘のまちなか、若宮八幡宮、舞鶴城跡などを散策し、ヨネビシ醤油(パリ万博(慶応三年(一八六七年))で銅碑を受賞)の工場を見学した。

歴史と風情を感じさせる黄門様ゆかりの地を前半に、伝統文化が溢れる鯨が丘を後半に、二つの顔を、実際に自分の足で歩いて体感することで、歴史と文化の風に触れることができた。ガイドブックだけでは得ることのできない風景やエピソードが随所に盛り込まれていた。

観光ボランティアガイド組織の大半は、行政や商工会議所、旅館組合等の関係団体の音頭取りで作られたものであるが、こは個人ベースで組織化され、行動している。「おもてなしの心」を大切にしながら、地域を訪れる方々に喜んでいただけることを糧に、日頃から地域を知る努力や新たな知識の習得に努め、日々活動に取り組んでいることを感じとった。

最近では、観光ボランティアガイド活動は、地域の紹介にとどまらず、地域づくりに貢献するなど、地域の活性化や交流に果たす役割がますます高まってきた。しかしながら、ボランティア仲間同士での人間関係、行政との関係、ツアーの下請け化、本職ガイドとのすみわけ、無償の限界など多くの課題も抱えている。

これらの課題を克服し、大子町の観光ボランティアガイド活動が、より定着し、さらに活動の活発な展開が図られることに期待したい。

(皆川)

新聞記事にみる満州移民の断片(五)

— 第九次冷家店大子町开拓団の軌跡 —

昭和十五年一月に渡満し、満州の大地に一步を記した大子町开拓団への応援体制についても少し述べておくことにしよう。拓務省の肝煎りによる応援作業班の班員として二十六名が選ばれたことは、前号でふれた。こうした班員の派遣は茨城県にとつて初めての試みであったようだが、同年七月二十三日に満州へ渡つたのは、応援作業班として二十名、冷家店开拓団員八名、同家族八名、合計三十六名の面々であった(十五年七月二十一日付「いはらき」新聞、以下同じ)。選考された班員は二十六名であるから、何らかの事情で六名は辞退したものとと思われる。

応援作業班一行には、大子国民学校教員の清水勝男に引率された大子女子技芸学校卒業生の大久保美代子、岡村たけ、益子芙蓉、成井敬子、斉藤美世の五人の女性が混じっていた。町主催の壮行会(七月二十日)とは別に、大子女子技芸学校は、七月八日午後一時から同校講堂で壮行会を開いた。二年生代表の壮行の辞、小林教頭の挨拶、齋藤浅川校長の祝辞について生徒達が五名を大陸へ送る種々の催しものがあり同四時盛會裡に散会した(十五年七月十日付)、と伝えられている。

この若い女性達五人が開拓の現地に応援で入ったことは、开拓団にとつて特別な意味をもっていたようである。『开拓の記録』は、次のように記している。「殺風景な団内が華いだ雰囲気になり、内地を思い出して、遠く離れた此の満州も彼女等の話し声と笑い声に一瞬内地との距離感が薄れ広漠とした視野が脳裡より消え去り、甘い感じに浸りました。今迄は、うら若い女性は一人も見ることが出来ませんでした」と。彼女達は炊事や野菜の手入れに従事していたようであるが、「手狭な部屋事情」

のため「背と背を寄せ合い重なる様に」(开拓の記録)寝ざるを得ない日々、慣れない生活環境のもとで疲労が重なったのであろう、八月二十三日、成井敬子は体調を崩して病床に伏すことになる。そして同月二十八日、約一八キロ離れた泰安街の病院で手当ての甲斐もなく帰らぬ人となってしまう。开拓団にとつては、最初の犠牲者であった。九月十七日、清水勝男ほか十八名は、成井の遺骨を抱いて大子駅頭に降り立った。

このような开拓の現場に直接赴いて応援する動きが出る一方、送り出す母体となる大子町にも強力に支援する組織が生まれた。「留守宅援護徹底化」と題した記事は、大子町役場で七月四日に開かれた北満分村移民送出協議会において、後援会を組織して开拓民並びに義勇軍の送出、残留家族の慰問並びに援護、満州分村の慰問激励、开拓民並びに義勇軍の趣旨普及等の事業に取り組むことを決定した(十五年七月六日付)。この北満分村後援会会長には、大子町長の永瀬三四郎が就任している。

昭和十五年には、もう一つ注目に値する動きがあった。「我等は行く」北満の地へ 大子町分村計画成る 今年年度中に二百七十戸移住」と題した記事は、十二月二日に役場で開かれた大子町北満分村計画協議会の模様を伝えている。「拓務省より佐藤久治氏、海外移住協会副参事谷口武氏、長岡農民道場青柳高之進氏外満拓公社、県職業農務両課、太田職業紹介所長、町内各種団体長、常会長、有志、関係者百余名出席し：協議した結果本年度中に百戸を送り明年度更に百七十戸を送る事を合せ三日より部落懇談会を開いて拓土送出に拍車をかけることになったが大子町としては中小商工業者の転失業者も相当渡満の希望があり、同町は既に四十一戸百八名の先遣隊が北満分村に入殖してをりこれが実現に一致邁進する事に決定」(十五年十二月四日付)した、と。开拓に、さらに拍車をかけようとの計画決定である。十五年は大きな節目の年になった。(齋藤)

【資料紹介】 大正四年「師範学校入学推薦書」について

太田一高の内田正人校長より、曾祖父内田熊藏、祖父美和よしかずに関する資料の御教示を受けたので紹介しよう。

内田熊藏は元治元年（一八六四）に鹿島郡中野村荒野に生まれ、大正四年（一九一五）、熊藏が校長をしている大子尋常高等小学校から三名の者が茨城県師範学校に志願した。

二月十七日、熊藏は茨城県師範学校の高藤太一郎校長あてに「本月十日附を以て御照会あいなり候本校卒業生三名の学業性行等取り調べ、此の段、御回答に及び候なり」と推薦書を送る。

その中で、「内田美和」については、

・学業 一、九十点 二、二十三人中の二番

三、算術・理科・歴史・農学等 四、唱歌七十八点

・健康 一、強健 二、在学中欠席少なく、殊に、尋常六学年より高等科卒業まで欠席なし 三、著しき疾患なし 四、遠山登足を好む

・性格及び操行 一、謹直にして着実、軽挙な振る舞いなく、

友愛厚し（受け持ち訓導記録による） 二、堅実 三、勉強

四、級次長として所作普通 五、親密 六、厚し 七、明瞭

八、尋一より高卒まで成績優等により毎年賞を受く。教育品

展覧会にて受賞六回、大正三年久慈郡模範児童として受賞

九、操行評価、甲

・家庭 一、父は職業教員、資産を有せず、実家は不動産を有す 二、（空欄） 三、（空欄） 四、敵ならざるも寛に失す

ることなし（この中の空欄については、追って書きで「内田

美和の分、家庭に関する二、三項を記入せざるは、小職と父

子関係あるを以て省きたる次第にこれあり候」という。）

合格の後、三月五日、師範学校から美和へ、入学に際しての

注意事項が通知された。

在学中に要する費用は、

・被服費は外套七円半、冬服三元、夏服二元、帽子一円、上靴及び下靴四円半

・食費は第一部生は四月より七月まで実費約二〇円

・書籍費は第一部生は四ヶ年を通して約三五円、第二部生は一ヶ年約七円

・修学旅行費は第一部生は四ヶ年を通して約二〇円

・雑費は毎月三円ないし四円

・四月十日午前九時より入学式を行うから、服装は洋服または

筒袖に袴を着用とある。

美和は戦中、戦後を小学校校長として勤務、昭和二十九年に退

職、昭和四十九年に七十五歳で死去した。

美和の教育観は、「読書百遍、意自ずから通ずは古くして常に新しき本質的なもので、作品の内容がよく分からなくても繰

り返し繰り返し読んでいく間に、読む人の心と詩がリズムを合

わせ動き始める。内心律と詩律の合奏が始まる。教師も児童も

同じ芸術に耽りながら読むべきであり、読んで聞かせるべき、

歌うべき、味わうべきだ。」（日立二高紀要十八号）という。

なお、都筑良雄と堀川賢明の二人も推薦された。

堀川については、「大正八年茨城県師範学校本科第一部卒業、

町付小学校を振り出しに大子、袋田、矢田、池田の各小学校々

長を歴任し昭和二十三年に三十か年の勤続を以て退職、終始一

貫教育事業に尽瘁せられてきた。その後、大子町議会議員二期

を勤められ、その間、司法保護委員、民生委員と社会福祉事業

に献身、ほか食料調整委員、農業委員、農協組合副理事長、農

業共済理事の各要職にあつて常に農業振興に努められ、その功

績は大である。」（大子町合併記念名鑑）という。

師範学校は、明治七年（一八七四）に創設され、尋常小学校

六年と高等小学校二年を修了したものが志願した。卒業後は、

幾多の人材が県内各地で情熱を持って子供たちの教育にあつ

たのである。

（野内）

【ふるさと写真帖】

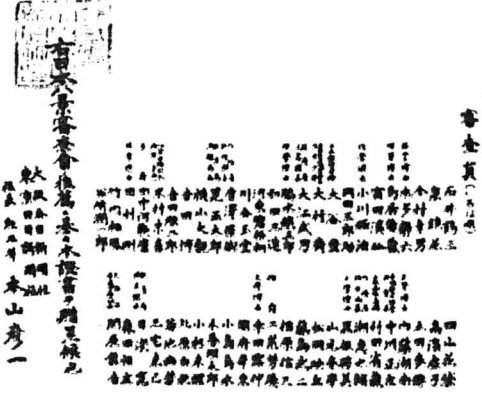
袋田瀑布「日本新八景百選」で日本二十五勝

昭和二年四月九日、東京日々新聞と大阪毎日新聞社は、「日本新八景」を国民投票によつて決定するという社告を出した。八景の内訳は、山岳、溪谷、河川、瀑布、海岸、平原、湖沼、温泉の八部門であった。その後、日本百選を追加し、更にその中間の日本二十五勝を追加した。審査員は田山花袋、谷崎潤一郎、横山大観、北原白秋など錚々たる顔ぶれであった。

推薦状

瀑布 袋田瀧

右日本新八景二十五勝ニ推薦ス



日本百景25勝に推薦された袋田の滝 (某家所蔵)

の部で室戸岬、平原の部で狩勝峠、湖沼の部で十和田湖、河川の部で木曾川、瀑布の部で華嚴の滝、温泉の部では別府が決定した。袋田の滝は、日本新八景二十五勝の一つに選ばれた。このときの滝部門の投票数第一位は袋田の滝で、四六万八三八票であったが、審査員の決定で投票数第九位の華嚴の滝が選ばれた。因みに平成二年四月の「日本滝百選」で袋田の滝は、トップで投票数四万通に達した。

(小澤)

編集後記

新年度に入り、四月二十四日(土)に「遊史の会」の諸先生方にお集まりをいただき、今年度の主な事業について検討し、次のような事業を進めることになりました。

- 一 「ほない歴史通信」の発行
- 一 大子町旧町村長等写真及び肖像画の調査・整理
- 一 満蒙開拓大子分村の調査・研究
- 一 ふるさと歴史講座現地めぐりの開催

例年開催しております「ふるさと歴史講座現地めぐり」につきましては、九月と十月の二回を計画する予定ですので皆さんのご参加をお待ちしております。

大子町では、四月十六日、待望の文化福祉会館がオープンしました。地域住民の交流促進や教育・文化の振興、福祉の増進、観光交流の振興などの拠点として運営されます。愛称は多くの応募の中から選考され、会館は私のもの、会館はいつも満員という思いを込め「まいん」と決定しました。(斎藤裕也)

編集人

- 斎藤 典生 (茨城大学人文学部)
- 野内 正美 (元 教員)
- 石井喜志夫 (元 教員)
- 小澤 園彦 (元 教員)
- 斎藤 裕也 (大子町教育委員会)
- 皆川 敦史 (大子町教育委員会)

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付
久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 0295(72) 2627